

広報

安達太良

【巻頭言】

「何のために」

二本松市立二本松北小学校長 大内 雅之

世の中の大人にこんな質問をしたらなんと回答するでしょうか。

Q 1 あなたの「職業・仕事」は何ですか。

Q 2 あなたは何のためにその職業・仕事をしていますか。

Q 1では「会社員」「公務員」「大工」等の職種を答えるでしょう。しかし、追加でQ 2をされると、普段あまり考えていないことにちょっと戸惑いながらも「生活するお金を稼がなくてはならないから」「夢の実現のため」等・・・いろいろな回答が出されるのではないのでしょうか。

さて、私たち教員が同じ質問をされたらどうでしょうか。「教員・教師」「小学校教諭」等と答えた後、Q 2では「子どもたちの豊かな成長のため」「子どもたちに生き抜く力をつけさせるため」等と多くの人が答えるのではないのでしょうか。ちょっといじわるかもしれませんが、本当にそう思っていますか。聞かれたから答えただけではありませんか。教員としての模範解答を探しませんでしたか。

いずれにせよ、私は教師という仕事を突き動かす一番大事なものは「何のために仕事をしているか」と言う問いに対する答え、心の中に核としてどっしりと根付く教師としての思い、強い自覚のように思えるのです。他からの受け売りではなく、自分の言葉での考えが必要だと思うのです。

この話は、中村文昭さんという方の講演で聞いたものでした。中村さんはお金を稼ぐことは必要なこととしながらも、お金以外に「何のために」がない仕事の大部分は「作業」であるとも話していました。そして、どの職業・仕事にも共通している「何のために」は、「人の役に立つこと、人を喜ばせること」だと言っています。美容師さんが髪を切ること、料理人が料理を作るのは作業、その作業を通して、人の役に立ち、喜ばせることこそが職業・仕事の意味であると。

私はどきとしたのです。この話を校長としての自分に置き換えたとき、自分の中の「何のために」が弱いことに、そして、日々の業務が「作業」になり、子どもたちや先生方などを喜ばせていないのではと思ったのです。そして、次の瞬間には、恥ずかしい話「でも、忙しくて・・・」と言い訳を考えている自分がいたのです。中村さんはこうも言っていたにもかかわらず。「できない理由を言わず、今できることを探して、すぐにやることが大切。」と。



多分、多くの先生方はしっかりと自分基軸の教師としての「何のために」をもちながら、日々の教育活動を送っていることと思います。私のようにブレブレの根無し草のような方はいないでしょう。しかし、学力向上、生徒指導対応、ICTの推進、保護者対応、地域連携、働き方改革・・・多くの学校課題への対応にあたっているとどうしても「何のために」を置き去りにし、小手先の手法に走ってしまうときがあるように思うのです。

教師の基軸となる「何のために」はすべての教育活動の土台になることはもちろんですが、その他様々な業務、活動にも「何のために（目的）」が存在しています。しかし、会議などではどうしてもその目的は意外と軽く扱われがちです。時間の制約、方法・留意事項の確認の必要性等、仕方のないところがあるのは承知です。しかし、よりよいものをみんなで作り上げるため、改善するためには目的の共有は必ずすることのできないことではないのでしょうか。多忙な現場だからこそ、「何のために」を教育活動の中心に据え、大切にしていかななくてはと考えます。

【特集テーマ】

「ふるさとを愛し共に未来を切り拓く
たくましい子どもの育成」に向けて

二本松市立油井小学校

児山 秀典

私は反物販売、精米、ガス配達等を生業とした商店に生まれました。忙しい毎日で私が自転車で配達もしました。私の幼少期は舗装道が少なく、多くは砂利道そんな時代でした。

ある日、精米した米を自転車に載せ、配達をしていた私は、バランスを崩し米を砂利道にばらまいてしまいました。私は叱られる怖さ・不安を感じながら米を集めて届けました。動揺を隠せない私を察してか、届けた先のおばあさんは私から事情を汲みました。すると届けた米を研ぎ、そしておにぎりを作り、私に差し出しました。「さすけねべ。ほだごどより拾って届けでくっちゃごどのほうがありがでぞ」としわだらけの笑顔で私を励ましてくれました。人のあたたかさ、そんな人たちが築く地域の温もりを感じ、自分もそんな思いを与えられるような人になりたいと思ったこの日のことを私は今も胸に刻んでいます。

地域教育資源の活用を通して、様々な歴史や風土、文化等をインプットし、そして相手意識を大切に、アウトプットをする取組は一定の成果をあげています。しかし「地域が、地域に住む人が、私に注いでいる眼差しや思い、期待等」に気付き、感じ、身近な将来、その先の将来に思いを寄せ、社会に生きる一人としてどんな未来を生きていくか、生きていきたいか、子どもたちの発達段階に応じた「社会形成能力」「キャリアプランニング能力」等、基礎的・汎用的能力の育成に向けた取組は、まだまだ不十分ではないかと思っています。令和6年度の教育課程編成には、ぜひこの視点を加え、「ふるさと学習」はもちろんあいさつや登下校の際の何気ない感謝の言葉、敬いや思いやり、世間話等の様々な交流等も大切に、日常に散りばめられた「郷土のよさや温もり」を感じ、郷土を、そして日本を担うたくましい子どもたちを育てていきたいと思っています。

【特集テーマ】

地域とともにある
「企業による学校応援団」

本宮市立五百川小学校

伊藤比呂美

地域企業と連携した質の高い教育活動を推進するため、本校では平成31年度に「企業による学校応援団」を結成しました。しかし、コロナ禍によりこの3年間ほど休止し、今年度復活しました。9月の学校運営協議会に合わせて「企業による学校応援団」の総会を開催しました。くるまックス本宮（トヨタ）様、アサヒビール様、御稲プライマル様と学校運営協議会委員や本校職員が一緒に話し合い、今後の連携した教育活動の可能性について考えました。この話し合いを基に、その後も打ち合わせを重ねて実現した一つが5年社会科の自動車勉強会です。福島トヨタ自動車様からご協力いただいて車5台（水素自動車、電気自動車、ハイブリッド車等）が校庭を走行し、児童が試乗しながら学びました。また、5年総合では、御稲プライマル様の協力で育てた米を、安達太良 SA 下りのレストランに無償提供し、活用してもらうことになりました。目的は、自分たちが育てた米（トリプルファイブ：児童命名）を通して、五百川の米、本宮の米、福島の米のおいしさを他県の方々にもアピールし、地域に貢献するためです。レストランの各テーブルにアピールのチラシを置かせてもらったり、お客さんにはお礼に交通安全とお米をアピールしたストラップを配付したりする予定です。2月6日には、5年生全員が安達太良サービスエリアに行き、お米の贈呈式を行います。その後一週間、レストランでは、本校のトリプルファイブがブレンドされたご飯が提供されます。今は、児童が広報活動に向けてチラシやストラップを作成中です。自分たちの思いをいかに届けるか、言葉を磨き、インパクトのあるデザインを工夫しながら頑張っています。



【特集テーマ】

地域に感謝！

地域と共にある小浜小学校

二本松市立小浜小学校 石川 勝佳

小浜小学校は、長い歴史と伝統のある学校です。

「創立150周年記念式典」には、多数の御来賓においでいただき、全学年児童・保護者・教職員とともに祝いました。地域のピアノ教室の先生が、50年前の創立100周年時に作られた記念賛歌「わになって」の曲の伴奏譜を作成してくださいました。記念式典当日の伴奏も引き受けてくださり、全校生で合唱することができました。

「記念講演会」では、岩代小浜の歴史と文化を護る会副会長さんに、演題「誇り高き小浜」の講演をしていただきました。

「記念企画展」の開催や「記念広報誌」の発行に向けては、PTA実行委員会の多大な協力をいただきました。昔の貴重な写真や動画・物品などの資料も学校へ届けていただきました。企画展の開催期間中は、地域の方々が連日おいでくださり、当時の思い出を語ってくださいました。

歴史と伝統の重さ・地域の人々の小浜小学校に対する熱い思いを改めて強く実感しています。



【創立150周年記念式典】

小浜の恵まれた地域環境を生かし、保護者や地域・関係機関との連携による教育活動をとおして、地域と共にある学校をめざすとともに、子どもたちの可能性を伸ばし、社会性や郷土愛を育んでいきたいと考えています。

【特集テーマ】

心通う

本宮市立岩根小学校

渡辺 博明

「田んぼ仕事してる時にね、『がんばってください〜い!』って声が聞こえてきたんです。」

夏のある日、本校コミュニティースクールの会長さんが私に教えてくれました。

「誰に言っているのか不思議に思っていたら『お仕事、がんばってください〜い!』って。その時、気付きました。私に言ってくれてたんだなって。」

話は続きます。

「その日はね、大きな声で『さようならっ!』で挨拶してくれる女の子もいたんです。うれしくなって、思わず手を振っちゃいましたよ。」

会長さんは目を細めて話します。

「私の顔を覚えてくれたんだなあと思うと、それがうれしくてね。いやあ、うれしかった。」

会長さんは、ここ数年、学校の畑を耕したり、野菜の手入れをしたり、朝の見守りをしたり…岩根小を支える、いわば、縁の下の力持ち。

でも、やっぱり子どもたちと直接触れ合ってほしい。そこで、今年は、会長さんにサツマイモの苗植えのご指導もいただきました。

12月。2年生が動きます。「お世話になった会長さんに感謝を伝えよう」の議題のもと、学級会で話し合い、当日は、会長さんを囲んでの大パーティー。

時代は過ぎ、いわねっ子の保護者は、新しい団地に越してきた方々がほとん



ど。でも、子どもたちが育つふるさととはここ岩根。だからこそ、地域の「人、もの、こと」に触れ、地域に学び、地域に育ってほしいと願い、「いわねっ子ふるさと学習」を大切に進めています。

人が集い、人がつながり、心が通う。

今日も、そんな岩根です。

【特集テーマ】

具体的な学びで未来を切り拓く

本宮市立和田小学校

佐藤 憲博

未来の姿として、自然エネルギーの利活用、食料の自給率を上げること、人口減少により 70 歳まで働くことなど、報道を目にする度に、多くの人が「どうなるんだろう」や「なんとかなるんだろう」と思っているはずである。

こうした未来像に対して、和田小学校の教育活動の中で子どもたちに、将来のきっかけになる体験や「こうすればいいんじゃないかな。」という考えをもたせたいと考えた。

本校でも、様々な体験活動をしている。白沢の地域性として農業にかかわるものも多い。代表的なものは、昇降口脇の田んぼを使った5年生の米づくり体験。10年以上お世話になっている根本さんの熱い指導もあり、当番制で水の管理まで行う。農作物を育てる苦労とやりがいを体験を通して学べる。地球は温暖化している。食料の多くを輸入にたよる時代ではない。次年度は、3年生が地域名産の山芋栽培にチャレンジする。将来、児童の中から、志ある担い手が現れてほしい。また、6年生は福祉体験をしている。学習発表会では、福祉の担い手不足問題に対して、未来の介護はこうなるという発表をした。たとえ介護にロボットが導入されても、心配りのある介護にはコミュニケーションやていねいな対応のアップデートが必要だという劇は喝采を浴びた。福祉、介護を深く学んだ成果である。

2040 年、働き手不足が深刻化する。今の小学生は、20代となる。体験活動と自分にできることを考える「社会に開かれた教育課程」のアップデートこそが、未来を切り拓く力となると信じている。個人と社会の well-being の実現を願いながら。



【趣味・随想】

つながる思い

二本松市立渋川小学校

佐藤 和彦

先日、二本松市年末年始における事件事故防止活動出動式が男女共生センターで行われた際、本校の5年生がアトラクションとして「渋川豊年太鼓」の演奏を披露しました。

この「渋川豊年太鼓」は代々5年生が演奏を引き継ぐ形で総合的な学習の時間を使って取り組んでいます。6年生が演奏の仕方を5年生に教え、下級生の子どもたちは「いずれが私たちも5年生になったら…」という思いを抱いています。

今年度、渋川小学校は創立150周年を迎え、「創立150周年記念学習発表会」を行いました。5年生は「渋川豊年太鼓」に関する歴史や経緯を詳しく調べ、発表しました。

本校で豊年太鼓に取り組み始めたのは、今から30年前でした。5年生の保護者の中に当時太鼓演奏を行った方がいて、指導をした先生と一緒に当時の練習や演奏の様子を直接うかがうことができました。

CD等もなかった時代なので、直接指導を受けるため、練習の時しか曲を覚えられなかったこと、道具が十分でなかったため、いろいろな物を代用したことなど、様々な苦労話もありました。がんばって練習し、演奏を発表したときの気持ちなどを聞く中で、子どもたちの「渋川豊年太鼓」への思いは大きく変化したように感じました。

学習発表会当日、教えていただいた地域の方々を招待し、堂々とした演奏をすることができました。その子どもたちの思いは親から子へ、上級生から下級生へ、30年間ずっとつながっているんだな、と強く感じ、その思いを大切にしていきたいと思いました。



【趣味・随想】

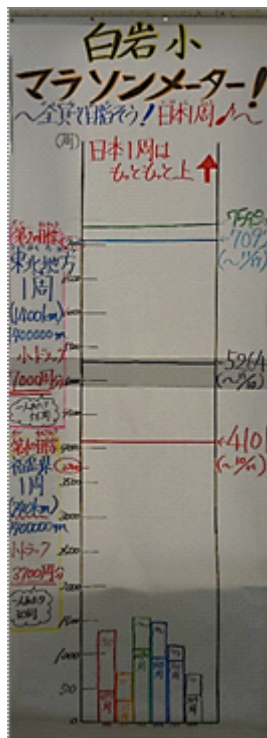
マラソンメーター

本宮市立白岩小学校

相楽 秀幸

本校の昇降口には「白岩小マラソンメーター」が掲示されている。週に2日、業間の時間に子どもたちがマラソンに取り組み、全員で日本一周を目指し、児童会が中心となって活動を進めている。

子どもたちの楽しそうに走る姿を眺めているうちに、私も一緒に走りたいという思いをもつようになり、歩くような速さではあるが、子どもたちに混じって走ることにした。管理職として部活動の指導からも離れ、意識しなければなかなか身体を動かす機会が少ないこともあり、児童会の活動に便乗して、自分の運動不足解消にも取り組むことにした。いざ走り始めてみると、予想どおり思うように身体は動かず、なかなか厳しい状況だったが、子どもたちと一緒に活動する中で、走る速さのことや走った周数のことについての話から会話が自然と増えて、息を切らしながらも楽しく有意義な時間を過ごしている。初めは少々苦しかった業間のマラソンではあるが、回を重ねながら、徐々に走る楽しみを実感できるようになってきた。業間に走れる距離は僅かであるが、その距離を子どもたちと同様にマラソンカードに記録している。厳冬期に入り、思うように走れない日が増えてきたが、目標の100周達成を目指して、できるだけ校庭に姿を見せて、子どもと共に走る時間とコミュニケーションを大切にしたいと考えている。そして、達成するにはもう少し時間が必要な子どもたちの全国一周の実現に少しでも貢献できればと思っている。



【趣味・随想】

コロナ禍の経験知を生かした
教育活動推進

大玉村立玉井小学校

佐藤 則之

令和元年度後半からのコロナ禍は学校現場に、様々な大きな影響を与えた。感染拡大による学年学級閉鎖や臨時休業、各種行事の延期や中止、各種教育活動実施の制限や制約等々、新型コロナウイルスの知見が十分ではなかったこともあり、判断も実践も試行錯誤の連続だった。先が見通せない困難な状況下で、常に感染リスクを見据えながら実施の可否を判断する基準として大切にすることは、「何のために行うのか」ということである。

「何のために運動会を行うのか。」「何のための授業参観は行うのか。」「何のために…」が実施の可否や内容等を精査する基準となった。この認識はコロナ禍の経験知として多くの学校の財産となっているはずである。

一方、弱みも露呈した。「今まではこうだった」が通用しないことへの柔軟な対応力が、学校現場と教職員に備わっていたかどうかである。目的を明確にせぬまま「例年どおり」や「地教委の指示のとおり」に取り組んできた学校現場や教職員ほど、当たり前が通用しないことに戸惑った。その結果、主体的な思考や判断を自らにではなく他に求めようとした。

「何のために行うのか」との明確な目的の認識なくして、必要感を感じる教育活動の展開は望めない。これは、コロナ禍で教育現場が再認識・再確認させられたことである。教師自身も何のために行っている活動なのかを認識しないまま行っていたとすれば、教育効果は期待できないことを肝に銘じるべきである。子どもたちにとっては、やらされ感が強いに違いない。これは、子どもの主体性、自主性を育む教育活動とは相容れない。

運動会は何のために行うのか、学習発表会は何のために行うのか、修学旅行は何のために行うのか、〇〇は何のために行うのか。「何のために」が明確な方がよい。

【趣味・随想】

「希望のチカラ」

本宮市立本宮小学校

佐久間 仁

早朝ウォーキングを始めて約3年になる。集団検診でメタボ症候群と診断され、医師から体重を減らすよう助言されたのが始まりだった。歩くついでに道端のゴミを拾うようになった。平日は1時間ほど、休日は2時間ほど二本松市内を歩く。歩数にして6千～1万2千歩ほど。お陰で体重は8 kgほど減り、お腹周りもだいぶスッキリした。

せっせとゴミ拾いする私を見て、妻がしきりに「二本松のブンケンさん」と言うので、何かと思ったらブンケンさんとは福島県内の主要道路を歩いて、「希望のカケラ」と唱えながら道端のゴミ拾いボランティアをしている方だと知った。「スポゴミ」と称して制限時間内に拾ったゴミの量を競い合うゴミ拾いの世界大会までであると知って驚いた。サッカーなどの大会で日本人サポーターが自発的にゴミ拾いをして、その行動が世界から称賛されるという話を耳にするが、道端に無造作に捨てられた大量のゴミを見るたびに日本人は本当に礼儀正しいのかと首をかしげたくなる。

ところで本校の3年生が総合学習で「福祉」について学んでいる。高齢者体験や障害者・点字体験などを通して、福祉の意味を学ぶ。「誰もが幸せになること」を目指して、身近な人のために自分にできることをしていこうとする気持ちの高まりを感じ、嬉しく思っている。この子たちが大人になったとき、ゴミを捨てる人でなく、ゴミを捨てない人、できればゴミを拾う人になってほしいと切に願う。子どもたちは、まさしく私たちの「希望」そのものである。

自分が生まれた故郷を誇りに思い、大切に作る気持ちを育てるのが大人の責務だと考える。子どもたちに美しい故郷を残してあげられるよう、私も体が続く限り「希望のカケラ」を拾い続けたいと思う今日この頃である。



【趣味・随想】

「寒桜」

本宮市立本宮まゆみ小学校 鈴木 規男

冬になると、美しい安達太良山を仰ぎ見る本校には、山から吹きおろす風が強く吹くつけ、寒さが一段と厳しく感じられることがあります。この時期に楽しみにしているのが、本校の南側にある中庭の法面に咲く小さくてきれいな花です。

昨年の12月初旬の朝、寒さに震えながら登校指導に出かけようとした際に、ふと小さな淡い紅白色の花がたくさん咲いているのに気がつきました。私は柄にもなく、その小さな花に見とれてしまいました。知識も関心もない私なので、それは何なのかを知る由もなく、職員に尋ねてみると「寒桜」だとわかりました。



これまでもさまざまな場所で出会ったはずなのですが、記憶に残りませんでした。では、なぜ今回はこれほど関心をもったのでしょうか。不思議です。気持ちに余裕がうまれて？・・・無い！年齢を重ねて四季の移り変わりに敏感になって？・・・もちろん無い！この理由を強いてあげれば「しあわせ」という言葉を口にするのが多くなったためだと思います。まゆみ小の目指す児童像に「しあわせを創るまゆみっ子の育成」が掲げられており、日々の子どもたちの姿を見ながら、しあわせを感じる場면을撮影してきました。するとちょっとした瞬間の表情や言動に目が向き始めている自分がいました。

寒桜には「あなたにほほえむ」という花言葉があるそうです。冬の寒い時期に咲く寒桜を見て春を思い、ほっとして顔をほころばせることからつけられたそうです。

今年も寒桜が咲き始めました。